

「性的虐待」をめぐる諸解釈

—対象者としてのヴァージニア・ウルフ

三 島 亜 紀 子*

1. 解釈するという欲望

「日記はみんなこの家にあるんですか」

「そうです」

何だか急にこの家全体が、ぐっと胸に迫ってくるような感じにおそわれる¹⁾。

1966年11月、神谷美恵子はヴァージニア・ウルフの夫、レナード・ウルフの住む「マックス・ハウス」を訪れていた。この頃、V・ウルフの日記は一部分しか公開されておらず、未公開の日記が所蔵されていることを知った神谷はそれを閲覧したいという思いに駆られる。当時、神谷はV・ウルフの「病跡」学的研究をする意志を固めており、貴重な資料を前に戦慄を覚えたのは想像に難くない。この時、神谷は一歴史家というよりも、精神医学を専門とする一医師として、隠された事実を知り、それを材料にウルフを診断したいという欲望に憑かれていたといえないだろうか。しかしながら、神谷は全ての日記が公開されるのを待たず、志半ばにして病のため世を去ることになった。

その後、日記は1977年から1984年にわたって出版され²⁾、V・ウルフ研究に

*1995年3月神戸女学院大学文学部総合文化学科卒業、1999年3月大阪市立大学大学院生活科学研究科人間科学専攻修士課程修了、現在、大阪市立大学大学院生活科学研究科人間科学専攻社会福祉学研究室後期博士課程

豊富な資料を提供した。なかでも多くの研究者の関心を集めるのは、ウルフが幼い時（6歳頃）の出来事である。それは著書『存在の瞬間』のなかでも明らかにされた。

食堂のドアの外に皿を立てかけるための棚があった。私がとても小さかったころ、ジェラルド・ダックワースが私をこの上にのせ、そこに私が座っているときに私の身体をまさぐり始めた。洋服の下へ入り込んでくる彼の手の感触を、思い出すことができる。断固として着々と下の方へ下の方へ進んでいく手の感触を。彼がやめるように私はどんなに望んだことか、彼の手が私の陰部に近づくにつれて、どんなに私が身をこわばらせ、あがいたかを憶えている。しかしそれは止まなかった。彼の手は私の陰部までも探った。私はふんがいし、それを憎んだことを思い出す³⁾。

ジェラルド・ダックワースは異父兄である。さらに、母のジュリア・スティーブンが亡くなった1895年頃、彼の弟のジョージ・ダックワースが13歳のヴァージニアを“sexual exploration”し、それが22歳頃まで続いたといわれている⁴⁾。

こうした事実に対して、さまざまな解釈がなされてきた。それらは、ウルフの幼い頃の性的経験と、その後のうつや幻覚、幻聴などといった「病状」、あるいは摂食障害やレズビアンの性的志向があること、自殺などの因果関係を究明する試みであったともいえる。ウルフの「狂気」が彼女に天才的な小説家としての才能をもたらしたという共通する前提があるとはいえ⁵⁾、それら解釈の群は相互に断絶しているのは明らかである。

さらに、同じ解釈であっても、社会的な拘束ゆえに地域差が生じることもある。ウルフ研究は英米、そして日本でもなされてきたが、この幼い時の経験が英米において“sexual abuse”、つまり「性的虐待」とされた段階において、日本では「色情狂的な迫害」⁶⁾、「性的いたずら」⁷⁾、「セクハラ」⁸⁾などと表記されたことをみても、その問題設定の基本的なあり方の違いを読み取ることが

できよう。ウルフの日記が出版された1970年代、英米では性的虐待を含む児童虐待が重大な社会的問題となりはじめた時代であった。身体的虐待に比べると性的虐待は問題化されるのが遅れたとはいえ、過去の性的虐待と現在の「病」とを結び付ける、古くて新しい知的作業が社会の中に浸透していった時期でもあった。それは児童虐待をめぐる新しい学問体系の勃興であったといえよう。さらにその学問的見地は、小説やドラマ、あるいは日々報道される児童虐待関連のニュースのなかなど、人々のあらゆる生活場面に影響力を持つようになる。日本では、ごく最近まで、この新興の「児童虐待の科学」とも呼ぶべき場が存在しなかった。それゆえ、この科学に依拠したウルフ論に対して、日本のウルフ研究者たちは無関心を装ったり、釈然としない感情を抱いたのではなかっただろうか。

例えば、ロジャー・ポールの *The Unknown Virginia Woolf* (1978)⁹⁾ やルイーザ・A・デサルボの *Virginia Woolf: The Impact of Childhood Sexual Abuse on Her Life and Work* (1989)¹⁰⁾ も、「児童虐待の科学」の言説のなかで展開されたといえる。しかし児童虐待が社会問題化されていなかった日本では、彼らの論が理論上理解されたとしても、支持され、現実感を持って語られることはなかったように思われる。換言すれば、日本では、ウルフは小説家として、フェミニストとして、精神病患者または神経症の女性として位置づけられ、検証されてきたが、社会的文脈ゆえに「被虐待児」と目されたことはなかった。本論では、ウルフの「性的虐待」をめぐる解釈を通じて、一小説家を対象とする学問的研究が、こうした社会的背景の差異に制限されていたことを指摘していきたい。

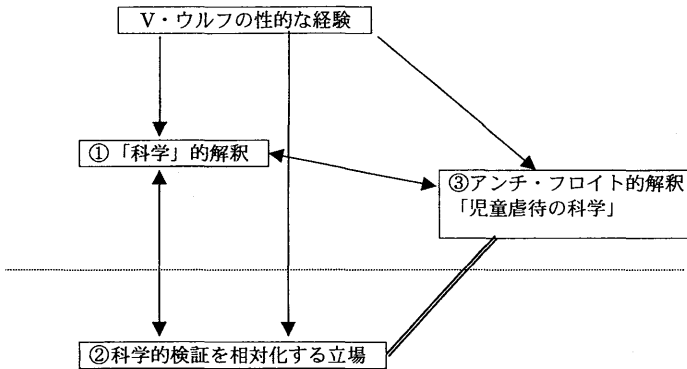
2. 病跡学という試み

既存の学問理論に依拠してウルフの作品を「暗号解読」¹¹⁾する試みは、伝統の域に達している。フロイト主義的精神分析学の視点からは、1950年代後半頃からウルフを解釈する試みがなされるようになった。それに遅れることなく、日本でも同様の研究が展開された¹²⁾。なかでもそれが本格化したのは、1976年

に前節の引用文を含む『存在の瞬間』が出版されてからである¹³⁾。

同書の出版によって、幼い日の性的な経験に焦点を当てた解説の攻防の火蓋が切って落とされた。それを作家による私小説風の告白と捉える素朴な解釈¹⁴⁾もあるが、大きくは次の3つの解釈に分類される。第一に、精神分析学をはじめとする「科学」的な研究。そしてそれに異議申し立てするかたちで興った第二の「科学」的検証を相対化する立場。そして最後に、フロイト批判という文脈のなかにあるのは第二の解釈と同様であるが、新しく興った「児童虐待の科学」ともいべき立場からなされる解釈があげられる。以下ではこれを順にみていく。

図1 V・ウルフ解釈の概観



第一の立場（図1①）において、「科学」的な解釈と言った時、主に精神医学や精神分析学を指す。もちろん、それらを一重に語ることはできないが、第二の立場からみれば同様に批判の対象である。なぜならそれらは、ウルフの作品の深部にある「真実」を掬い取ろうと、「科学」的にウルフを解明しようとした点という意味では、動機を同じくするからである。科学的まなざしをウルフに投げかけることこそが、彼女と彼女の文学作品とを結ぶ神秘的なつながり

を解明することであり、文学批評の範疇において何らかの発見がなされるとの期待されたのであった。作家に注がれる科学的なまなざし。それが綿密さや権威付けが必要不可欠であることは、医師である神谷美恵子の「診断」が度々引用されたことをみるに明白である¹⁵⁾。ちなみに神谷はウルフを「非定型性精神病」とし、同じく精神医学を専門とするフランク・フィッシュは「循環気質(躁鬱病)」とみなすが、こうした診断の試みが幾度となくなされた¹⁶⁾。

一方、これら三つの立場の間における代表的な論争として、身体因か心因かという対立がある。これは、ウルフの「狂気」は遺伝・器質上のものであるか、それとも幼い頃の性的な体験や身近なものの死などといったトラウマがもたらしたものであるかという問いである。心因については節を改めるとして、身体因を支持するものたちは特に、ウルフの家系に多くの精神病患者が存在したことを強調し、ウルフの「狂気」を遺伝上のものと結論付ける。実際、父方の祖父やいとこ、異母姉妹などの身近な血縁者たちに精神病患者や知的障害者が比較的多く存在した¹⁷⁾。

しかしながら、身体因と心因の両者は必ずしも対立しあうものではない。神谷は遺伝的な要素の重要性を説きつつも、「義兄の性的いたずら」は「一生忘れられない『心的外傷』なのであろう」とし、それが「結婚後の不感症や終生にわたる軽い同性愛的傾向が説明されるかもしれない」¹⁸⁾とした。

3. フロイト理論とヴァージニア・ウルフ

現在の逸脱行為や病の原因を過去、特に幼少期におけるさまざまな体験へと求める。こうした手続きは、手厳しいフロイト批判をおこなう論者さえもが、フロイトの功績の一つとして評価するものである¹⁹⁾。フロイトを創始とする精神分析学がアカデミックなものとして、あるいは好奇の目でもって、時には反発を伴いながら普及していった、まさに同時代にウルフは生きていたのである。さらに彼女は中産階級で女性、フェミニスト的であったうえに精神的に不安定という、当時の典型的な精神分析学の患者の属性を有していた。ウルフは

フロイトに準拠する視線にさらされ、それを疎ましく感じつつも、一方ではその言説に自ら身を委ねる面もあった。彼女は『存在の瞬間』において、フロイトの提示した概念であるアンビヴァレンスという言葉を利用しているが²⁰⁾、まさにそうしたアンビヴァレントな態度をとったといえる²¹⁾。

例えば、ウルフへのフロイトの影響を検証する時も、ウルフ研究者たちは彼女の態度に翻弄されてきた。ウルフは無邪気にフロイト理論を下敷きにしたと思えば、一転して無関心を装うことがある。現に、ハーバードの学生の質問に答える手紙(1932年3月)のなかにもはっきりと「フロイト博士や他の精神分析学者について研究したことはありません。—確かに、そうした人たちの本は全く読んだことがないと思います」²²⁾と述べられている。またウルフの甥にあたるクエンティン・ベルも、ウルフがフロイト理論に関心がなかったことを断言している²³⁾。

その一方で、フロイトとウルフの関係の深さは、しだいに明らかにされていった。それは、夫婦で経営していた出版社であるホガース・プレスが一連のフロイトの著作を翻訳出版しつづけたことや、最晩年の彼の住居を訪問した(1939年1月28日)こと、実弟エイドリアン・スティーブンを精神分析医であったことなどをあげ連ねることによっても強調できる。柏木は、ウルフの日記と手紙のなかにフロイトについての言及が増え始めたのは1939年7月以降であったことを検証した²⁴⁾。また、彼女の作品のなかにも、フロイト理論を思わせる記述が数多く散在している²⁵⁾。

確かに、日記を手にすることができる現在、ウルフとフロイトの関連を辿ることができよう。そこには、彼女の相対立する態度が読み取れるのも事実である。フロイトに対して反感を持つウルフ²⁶⁾と、彼の理論を援用するウルフ²⁷⁾。この矛盾した彼女の態度は、次に述べる科学を相対化する立場のウルフ研究者に賞賛され、かつ批判される要因となっている。

4. 科学の相対化：優生学批判・フェミニズム

ウルフを論じるにあたって、科学的検証を相対化する立場（図1②）は、優生学批判やフェミニズムなどの文脈からなされる場合が多い²⁸⁾。これらの立場は生前のウルフを取り囲んでいた医学的言説のあり方に攻撃の矛先を向け、それに依拠してウルフの文学作品を批評しようとした文学研究者たちを暗に揶揄する。

まず科学を相対化する立場のものたちは、ウルフを取り囲む当時の精神分析学が、ダーウィニズムの影が色濃い擬似科学であったことを告発する。例えばポールは、ウルフの主治医の1人であるT・B・ヒスロップが優生学的見地からウルフに子供を産まないように指導をしたことを指摘している²⁹⁾。ウルフは子供の扱いがうまく、しばしば自分の子どもを欲しがったが、結局その医師の指導に従った。ウルフは「科学の司祭」³⁰⁾たる医師の診断に従わざるをえない社会状況のなかの犠牲者と位置づけられる。

加藤めぐみは、ウルフを診断した医師らを「狂気と正気の境界線を仕切る管理人」³¹⁾としたうえで、彼らが「狂人＝ウルフ」を「先天的な進化の欠陥品、人類を退化に導く遺伝子の保持者」と位置付けたうえでそれを根絶させる社会的な使命のもと、子を持つことを禁じたと分析する。そこでウルフは、作品や、医師・看護婦たちへの敵意や体を張った抵抗を通じて、自らを排除に追い込む医学的言説に異議申立てを継続してきたという³²⁾。

次にフェミニストたちによると、彼女の「狂気」は男性中心主義をその本質とする学問のなかから生じたものとして位置づけられる。フロイトは1885年から1年間、パリのサルペトリエール病院のジャン・マルティン・シャルコーのもとに留学するが、ここで彼はシャルコーのヒステリー研究に魅せられる。ヒステリーはヒポクラテスの時代から女性に関わる問題とされ、特に子宮の状態に関連するものとされてきた。その後、フロイトが精神分析学の基礎を築いていったことは周知のとおりである。つまり、19世紀後半からの自然科学的な形

式を装った精神分析学とは、女性を逸脱者として対象化し、施術者としての男性が彼女を治療するといった役割分担を幾度となく体現させ、男性／女性を、合理／非合理の二項対立に収斂させていくものであった³³⁾。さらに結城淑子は、ウルフの「病状」さえも一つの表現様式として肯定したうえで、ウルフ文学研究を読み直すべきだという³⁴⁾。

またフェミニストたちは、発作を起こしたウルフに長時間の勉強を禁じた医師に対して批判的である。ウルフ自身が『自分だけの部屋』において、女性に関する既存の学問を人文学的には学ぶべき所はあるが科学的には無価値であると言いつつ³⁵⁾、フェミニストにとって当時の学問とは女性を家父長的な拘束のもとに置く一つの道具に過ぎなかった³⁶⁾。

しかし、フェミニストたちは、ウルフのアンビヴァレントな態度に対して敏感でもあった。前述したように、ウルフは当時の医学的な言説、男性中心の社会や学問に対して異議申し立てをしたと同時に、それに身をゆだねる部分があった。この立場はウルフのこうした従順な面を批判するのである。

ここで一括される「科学」を相対化する立場の間に相違がないことはない。それは『ダロウェイ婦人』におけるセプティマスの自殺をどう捉えるかという問いにも現れる。エレイン・ショーウォーターにとって、F・ナイチンゲールのヒステリーが当時の社会への抗議であったのと同様に、セプティマスの死は医師という専門職に対する挑戦であり、その知の体系からの解放であった³⁷⁾。それに対して加藤は、彼の自殺を「＜優生学的言説＝逸脱者の排除＞を共有する身ぶり」とする。つまり、ウルフが一方では優生学的な言説に従順であったことから、彼女は自らを優生学的言説に照らして、それを無用のものと診断したがゆえに自殺に踏み切ったという。

5. アンチ・フロイトかつ「児童虐待の科学」

科学を相対化する立場の議論はごく最近のものとはいえ、ウルフの受けた「性的虐待」をめぐる解釈における対立は、日本でも存在していた。しかしながら

ここで述べる立場は、これまでも紹介されてきたとはいえ、日本ではリアリティを獲得するに至らない社会的背景があった。この立場は、科学を相対化する立場と同様に、特にフロイト批判を展開し伝統的な精神分析学の限界を示すが、「科学」を追究するということを放棄していないという点で異なっている。それはいわば、「児童虐待の科学」ともいうべき専門家による新しい試みに依拠するものとして位置づけることができる（図1③）。まず、この立場の前提となっているフロイト批判について概観したあと、その新しい科学との関連について述べていく。

20世紀の人間科学に大きな影響を与えることになるフロイトの精神分析学は、もとはといえば精神的疾患の病因を幼児期の性的な実体験に求めるという説（＝「誘惑理論」）を、「性的な実体験」ではなく単にそれを幼児の抱く幻想であるとみなし、純粹に心的現象の次元だけで分析をおこなう「衝動理論」に転換した時点から人々の注目を集めるようになった。子どもの性欲を前提とするこの衝動理論は、フロイトがそれまで掲げてきた誘惑理論を放棄して打ちだされたものであった³⁸⁾。誘惑理論にはクライアントの幼少期に起こった性的体験という外部条件を必要とするが、衝動理論はクライアントが父親に犯されることを夢想する「倒錯的、近親相姦的で殺人狂的な夢」³⁹⁾のみで精神分析を成立させることができる。

アリス・ミラーは『禁じられた知』において、フロイトが誘惑理論を放棄したことを問題視し、彼が掲げる衝動理論を批判した。彼女はフロイトが「おとなの無意識のなかに存在する乳幼児期の苦悩（虐待を受けたという事実・筆者注）をかいま見、それに触れ」たにもかかわらず、その誘惑理論を放棄するに至った結果、社会はその問題に目を閉じることになったと批判する⁴⁰⁾。このことに関して、フロイト自身は1897年のフリースあての書簡のなかで、誘惑理論は虐待行為自体の「ありそうにもなさ（非蓋然性）」に敗れたと記している⁴¹⁾。ここで誘惑理論を放棄したフロイトは、「強力な父権の支配する家庭像に囚われ」⁴²⁾た「時代の子」⁴³⁾にすぎず、その狭隘さがミラーらの反発を招いた。

デサルボはこのミラーの批判を引用して、ウルフが「性的虐待」を受け、それを告白したのにも関わらず、フロイト的な思考が優勢を占めるなか、その告白が「ファンタジー」とされたことを非難している⁴⁴⁾。この点に関しては、フェミニストラの批判と方向性を同じにするが、再び科学として再構築を目指したものに依拠しているという点でそれらとは異なる。ミラー自身も、衝動理論を提示したフロイトを単に批判するのではなく、誘惑理論を展開した1897年までの彼の業績を評価している⁴⁵⁾。1960年代から台頭した児童虐待への関心の増大と、それに対応する形で成立してきた「児童虐待の科学」ともいうべき体系は、こうした潮流のもとに存在しえた⁴⁶⁾。

では、その「児童虐待の科学」を概観してみよう。半世紀以上にわたる児童虐待への無関心ののち、*Journal of the American Medical Association* に掲載されたヘンリー・ケンプらの論文「被殴打児童候群 (The Battered Child Syndrome)」⁴⁷⁾は、再び虐待問題に注目を集める契機として重要な役割を果たした。同論文では「身体的虐待 (physical abuse)」にあたる虐待のみに焦点が絞られていたが、短期間のうちに「虐待の定義は拡大し、この身体的虐待のほかには養育の拒否および放棄 (neglect)、性的虐待 (sexual abuse)、心理虐待 (emotional abuse) を含むように」⁴⁸⁾なり、児童虐待研究は「発展」⁴⁹⁾の様相を呈するようになった。こうした児童虐待問題への関心の増大に伴って、各種法律が短時間のうちに整備されていく。例えばアメリカではケンプらの論文が出た翌年の1963年から1967年の間に児童虐待通報法が全州で制定され、1974年には児童虐待防止対策法が成立した。

この時、医師をはじめソーシャルワーカーや心理カウンセラーなど、多様な専門家がその研究に与し、それぞれの学問的観点から虐待問題への取り組みがなされた。そこには虐待がもたらす心理的・身体的・知的・情緒的側面への影響の考察や、虐待が生じやすい家族の分析、虐待を受けた子どもや成人へのカウンセリング、または虐待行為をする親への治療・教育プログラムの作成などといった、実にさまざまな実践領域が広がっている。ここでは便宜上、これら

の取り組みをおこなう学問を「児童虐待の科学」と呼ぶ。

また、この「児童虐待の科学」の創生期には、上記のような治療的介入の技術の向上が目指されたが、バックラッシュを経たイギリスでは、リトマス試験紙のようにハイリスク家庭か否かを判定するツールを開発することも重視されている。それは治療の限界を認め、ハイリスク家庭と診断された場合には、被虐待児を家庭から保護するために重要とされる。しかしながら、ここで義兄の虐待を阻止するためにウルフを家庭から引き離すことは、文学研究の目的ではない。したがって、主に初期の治療的試みに準拠する研究者たちが、ウルフを事例とし、自らの説を正当化する道具として重宝したことに着目したい。

ところで、性的虐待は虐待の定義が拡大するなかで定着していったが⁵⁰⁾、特に性的虐待に焦点を当てた研究もなされた⁵¹⁾。ウルフ研究も、こうした性的虐待をとりまく新興の学問的言説のなかで展開されたといえる。次節では、いくつかその例をあげてみる。

6. 「性的虐待の科学」への準拠

デサルボは、*The Impact of Childhood Sexual Abuse on Her Life and Work* という副題のついた著 *Virginia Woolf* のイントロダクションの冒頭で、ウルフを次のように位置づけている。

Virginia Woolf was a sexually abused child ; she was an incest survivor⁵²⁾.

このサバイバーという言葉は、子どもの頃に性的虐待を受けた人に対する治療的アプローチのなかでしばしば用いられる。survivorの本来の意味は「生き残った人」であるが、斎藤学はこの言葉には3つの意味があると紹介している。一つ目は文字どおり、「過酷な子供時代を何とか生き延びる」ということ、二つめの意味は、自らが虐待する親にならないよう、「成人になった時点で親の病気の伝承を回避する」ということである。そして第三の意味は、「情緒的損

傷から回復する」ことであるという⁵³⁾。

こうした局面におけるサバイバーとなる一つの方策として、性的虐待を受けた子どもが自らの経験を語り、「言説」の実践主体となることがあげられる。森田ゆりは『沈黙をやぶって』のなかで、性的虐待のサバイバーの「語り」を集めている⁵⁴⁾。多くの場合、サバイバーは専門家たちに代弁されるより、自分自身が語りの主体になることによってサバイバーたりえる。また、彼女(彼)らサバイバーはセルフ・ヘルプ・グループのなかで同じ問題を抱える人と治療的な場を共有することもあるが、そこでもやはり語りが重要になってくる。

「自分の過酷な過去を受け入れ、それを強いた親の愛の限界を受け入れ、生き延びた自己を慈しむことができるようになった時点で、自己治療(サバイビング)は完結する」⁵⁵⁾が、ウルフの場合は「過去のスケッチ」などの作品を通じてサバイビングを遂行したと解釈されるだろう。注目すべきは、ウルフの作品をしたためるという行為が、「児童虐待の科学」の言説における治療的行為とされた点である⁵⁶⁾。

一方、「児童虐待の科学」には、「性的倒錯」が次々と感染していくような論理がある。ここで「虐待する親は虐待されていた子ども」であり、「虐待する子どもは将来の虐待者」とされる。この「虐待のサイクル説」⁵⁷⁾は性的虐待のみならず、あらゆる虐待に当てはまるものとされ、児童虐待を語る際になかば常識とされている。この説はさらに、「虐待される妻は虐待される子の母」⁵⁸⁾という見地や、「バタード・ウーマン・シンドローム」(battered women syndrome, 夫や恋人から殴打される女性症候群)にまで、その影響の広がりが見られる。デサルボはこの論理も取り込み、ウルフのケースにもそれを適用した⁵⁹⁾。そこでは、性的虐待の温床となった家庭を築いたといえる、ウルフの両親であるレズリー・スティーヴンとジュリア・スティーヴンの子ども時代における虐待の可能性を検証している。そこに「虐待のサイクル」を見出そうとしたのだ。思えば、ポールの *Unknown Virginia Woolf* も、夫のレナードやベルが批判したように、「児童虐待の科学」に依拠して展開された著であったとい

える⁶⁰⁾。

7. おわりにかえて

以上ではウルフという一小説家の「発作」や度重なった自殺未遂とその成功、あるいは「異常」とされた性的嗜好などをあげ連ねて、その原因を追究する諸言説の攻防を考察してきた。それらはある学問の見地に準拠して展開されており、その対立は本来の学問的対立と二重映しになっているようにみえる。

実際、児童虐待の予防や介入を試みる多くの専門家たちがウルフを一つのケースとして扱い、自らの理論を証明するために役立てていると捉えることもできる。例えばブレット・カーは、「子どもへの性的暴行」のなかで、ウルフの自殺や「苦悩」の原因を義兄らによる「性的虐待」にあると結論づけた⁶¹⁾。また、アリス・ミラーもフロイト理論を批判するなかで、彼の衝動理論の犠牲者の一ケースとしてヴァージニア・ウルフをあげ、検証している⁶²⁾。1960年代から台頭してきた「児童虐待の科学」ともいべき新しい学問領域においては、ウルフは解読可能な典型的事例として重宝され、彼女の作品はサバイバーとなるための「語り」として位置づけられるようになった。つまりここに、理論を実証する一つのケースとしてウルフが引用される一方で、その理論に依拠してウルフが解釈されるという奇妙な共犯関係が浮かび上がってくる。

ところで、性的虐待を受けている子どもは、それを秘密にする傾向があり、虐待を聞き出すのは並大抵のことではないといわれている。なぜなら性的虐待は秘密裏に起こり、家族や共同体の所為と禁忌によって秘密は保たれたままとなるからだ⁶³⁾。デサルボはウルフのケースにおいてもこれを援用し、さらなる「虐待」の証拠を探そうとしている⁶⁴⁾。

しかしながら、ウルフはその禁忌によって守られた「性的虐待」行為を「過去のスケッチ」で自ら公にしたことは事実である。これを単に小説家の私的な「告白」ととるか、フロイト的に「妄想」ととるか、ナラティブ・セラピーにおける過程と読み替えるか。こうした問題関心によってウルフの人物研究が成

立してきた面もあるが、日本ではごく最近まで依拠すべき一つの学問領域——「児童虐待の科学」——が成立する局面になかった。それゆえ、この新しい学問的観点からのウルフ研究が本格的に発展しなかったとすれば、社会背景の相違がもたらす文学研究の志向性の違いが明らかになるだろう。

しかし、2000年に「児童虐待の防止等に関する法律」が制定されるなど、今や日本でも児童虐待は人々の関心を集める社会問題となった。こうした状況の転換とともに、今後、「児童虐待の科学」に依拠するウルフ研究が日本においても展開されていくとするなら、社会的文脈に拘束される文学研究の意義について考察するべき余地があるのではないだろうか。

- 1) 神谷美恵子「V・ウルフの夫君を訪ねて」『ヴァージニア・ウルフ研究』神谷美恵子著作集4、みすず書房、266頁、1981年。
- 2) Woolf, Virginia, Bell, Anne Olivier, *The Diary of Virginia Woolf*, The Hogarth Press, 1977-1985.
- 3) Woolf, Virginia, Schulkind, Jeane eds., "A Sketch of the Past," *Moments of Being: Unpublished Autobiographical Writings*, The University Press, p. 69, 1976. 訳は、出淵敬子他訳『存在の瞬間—回想記』みすず書房、105頁、1983年を参照。
- 4) Poole, Roger, *The Unknown Virginia Woolf*, Cambridge Univ. Press, 1978, pp. 28-29.
- 5) 狂気を武器にすることに関して、ウルフ自身は意図的である。Woolf, Virginia, *The Moment and Other Essays*, The Hogarth Press, 1947, p. 15. また、神谷の大きな関心の一つが「天才」であったことから（明石み代「思い出すままに」『神谷美恵子著作集月報』第4巻、7頁、1981年）、両者をつなぐ線は見えてくる。
- 6) 柴田徹士「ヴァージニア・ウルフと性」『英語文学世界』第11巻第2号、5頁、1976年。
- 7) 神谷美恵子「V・ウルフ病跡おぼえがき」前掲書、155頁。
- 8) 大和田寛「ヴァージニア・ウルフの病跡学的研究：日記・手紙（Ⅱ）」『東京家政学院大学紀要』第39号、86-88頁、1999年。
- 9) Poole, R., *op. cit.*
- 10) DeSalvo, Rouse A., *Virginia Woolf: the Impact of Childhood Sexual Abuse on her Life and Work*, Ballantine books, 1989.
- 11) Peach, Linden, *Virginia Woolf*, Macmillan, 2000, pp. 33-35.

- 12) 例えば、安藤一郎「現代の英国女流心理派作家に就いて」『精神分析』第2巻、150-159頁、1934年。ウィリアム・ジェームスの心理学を援用した、神戸利喜夫[W. Jamesの心理学の諸原理とV. Woolfの意識の流れの小説]『愛知学院大学論叢 一般教育研究』第10号、43-54頁、1965年。柴田徹士「小説研究と精神分析」『英語青年』第107巻第9号、679-680頁、1961年。
- 13) 柏木秀夫「ヴァージニア・ウルフとフロイト」『言語文化部紀要』第23号、141-164頁、1992年。
- 14) 例えば、石井康一「ヴァージニア・ウルフの半自叙伝について—‘Moments of Being’」『福岡大学人文論叢』第11巻第2号、287-300頁、1979年。
- 15) 例えば、大和田寛「ヴァージニア・ウルフの病跡学的研究：日記・手紙（I）」『東京家政学院大学紀要』第37号、101-113頁、1997年。セプティマスの死によって「理性や合理精神の限界」が示されたとする窪田憲子も、彼の「病状」を診断するに当たって、神谷を引用する。窪田憲子「狂気と認識—『ダロウェイ婦人』におけるセプティマスの存在」『津田塾大学紀要』第16号、129-144頁、1984年。
- 16) 最近でも「病跡学的研究」と題された大和田による論文が報告されたが、ここでも基本的に心因を「主観的」として器質的な「事実」の叙述が試みられている。大和田、前掲論文、104頁、1997年。
- 17) ヴァージニア・ウルフ、『存在の瞬間』、152-154、187、253頁。Bell, Quentin, *Virginia Woolf: A Biography*, Vol. 2, p. 5, pp. 35-36, 1979. 神谷美恵子、前掲書、113-133、224-225、228-230頁など。最近の研究においてもこれが踏襲されている。1997年や窪田、前掲論文、136頁など。
- 18) 神谷美恵子、前掲書、155頁。他にも宮田恭子『ウルフの部屋』みすず書房、191頁、1992年。
- 19) 例えば、アンソニー・ストウ、原者鈴木晶訳『フロイト』講談社、211頁、1994年。
- 20) Woolf, V. *Moments of Being*, *op. cit.* p. 108.
- 21) ウルフのアンビヴァレントな態度を示したものとして、武井ナヲエ「フロイト博士とV・ウルフ」『ヴァージニア・ウルフ研究』第5号、1頁、1988年、加藤めぐみ「ミルクと帝国主義と—ウルフにおける『母性』の言説」『英語青年』第143巻第12号、694-696頁、1998年など。
- 22) Woolf, Virginia, Nicolson, Nigel ed., *A Change of Perspective: the Letters of Virginia Woolf*, Vol. 5, The Hogarth Press, p. 36, 1979.
- 23) Bell, Quentin, *op. cit.*, Vol. 2, p. 19.
- 24) 柏木、前掲論文、150-152頁。また、ウルフは幼年期の埋もれた体験が持つ意味の重要性について注目していたことを指摘している。同左、145頁。

- 25) これについては、武井、前掲論文、1-17頁、柏木、前掲論文などに詳しい。
- 26) ウルフによるあからさまなフロイト批判は、Woolf, V., *op. cit.*, Letters 3, p. 135. などに見られる。また、『ダロウェイ婦人』では、痛烈な精神分析学批判が展開されている。ヴァージニア・ウルフ、丹治愛訳『ダロウェイ婦人』集英社、1998年。丹治愛によると、ウルフのこうした言明は、フロイトの理論は人間の精神を複雑化するよりは単純化するものとして反感を憶えたものと推察している。丹治愛『モダニズムの詩学—解体と創造』みすず書房、184頁、1994年。
- 27) ウルフは自分と母との関係を、フロイトの「カタルシス」という概念を念頭において分析している。柏木、前掲論文、154頁。
- 28) これらの立場の論拠となった人物として、ミシェル・フーコーの存在は重要である。この点に言及したものとして、小杉世「ウルフと精神医学—神谷美恵子とM・フーコーとの関連において」『ヴァージニア・ウルフ研究』第15号、1-13頁、1998年。蛇足になるが、後述のナラティブ・セラピーにもフーコーの影響が大きかったことを考慮すると、興味深いものがある。
- 29) Poole, R., *op. cit.*, p. 121. この「診断」が下される前に、別の医師にもかかっており、子どもを産むように勧められていたが、ウルフ夫妻はそれに納得することはなかった。
- 30) ヴァージニア・ウルフ、『ダロウェイ婦人』、130頁。
- 31) 加藤めぐみ「生まれながらの逸脱者ヴァージニア・ウルフ—精神医学のダーウィニズムによる『狂気』の診断」『ヴァージニア・ウルフ研究』第9号、16頁、1992年。
- 32) 加藤めぐみ「And Would He Go Mad?—V. ウルフの権力／言説との闘い」『ヴァージニア・ウルフ研究』第10号、13-26頁、1993年。
- 33) エレイン・ショーウォーター、山田晴子・園田美和子訳『心を病む女たち—狂気と英国文化』朝日出版社、1990年。ヤニク・リーバ、和田ゆりえ・谷川多佳子訳『女性と狂気—19世紀フランスの逸脱者たち』平凡社、1993年。エティエンヌ・トリヤ、安田一郎・横倉れい訳『ヒステリーの歴史』青土社、1998年など。
- 34) 結城淑子「レズビアン作家としてのヴァージニア・ウルフ」『ヴァージニア・ウルフ研究』第7号、24-38頁、1990年。同様の見方として、リングダル・ゴードン、森静子訳『ヴァージニア・ウルフ：作家の一生』平凡社、101頁、1998年。
- 35) ヴァージニア・ウルフ、川本静子訳『自分だけの部屋』みすず書房、49頁、1999年。
- 36) ショーウォーターも、15歳のウルフが学習時間を制限されたことに関して批判的に取り扱っている。ショーウォーター、前掲書、159頁。
- 37) 例えばエレイン、同上、246-248頁。ナイチンゲールに関する記述は、78頁。
- 38) ジグムント・フロイト、懸田克躬・吉田正巳訳『フロイト選集第9巻ヒステリー研

究』日本教文社、350頁、1955年。

- 39) ジグムント・フロイト「精神分析学入門」懸田克躬責任編集『フロイト』中央公論社、414頁、1978年。
- 40) アリス・ミラー、山下公子訳『禁じられた知—精神分析と子どもの真実』新曜社、167頁、1985年。
- 41) こうした一連の批判は、無修正のフリース宛ての手紙が出版された1980年代に最も盛んとなる。衝動理論では、性的虐待のみならず、身体的虐待も空想の産物とされた。ラリー・ウルフ、寺門康彦訳『ウィーン—八九九年の事件』晶文社、386頁、1992年。
- 42) ミラー、前掲書、167頁。
- 43) ラリー・ウルフ、前掲書、373-383頁。
- 44) DeSalvo, R. A., *op. cit.*, pp. 7-8.
- 45) ミラー、前掲書、76頁。
- 46) 例えば、北山秋雄「性的虐待の歴史と発生理論」『子どもの性的虐待—その理解と対応をもとめて』大修館書店、58-60頁、1994年。
- 47) Kempe, C.H., *et. al.*, "The Battered-Child Syndrome," *Journal of the American Medical Association*, Vol. 181, No. 1, pp. 17-24, 1962.
- 48) 西澤哲『子どもの虐待—子どもと家族への治療的アプローチ』誠信書房、4-5頁、1994年。
- 49) Helfer, R.E. and Kempe, C.H., *Child Abuse and Neglect: The Family and the Community*, Cambridge, 1976.
- 50) 19世紀後半の「インセストの再発見」については、拙稿「社会福祉の学問と専門職」大阪市立大学大学院修士論文、1999年、第4章第3節第1項を参照。
<http://ehrich.shinshu-u.ac.jp/tateiwa/1990/990300ma.htm>
- 51) 例えばニージェル・パートンによると、イギリスにおける性的虐待を扱う専門家的態度は心理・精神医学的なアプローチと、身体的な徴候を読み取る医学的アプローチの二つに分類される。Parton, N., *Governing the Family: Child Care, Child Protection and the State*, Macmillan, pp. 84-91, 1991. 前者ではカウンセリングで解剖学的に正確な人形を用い、幼い子どもでも密室で何が起こったかを表現できるような手法を發展させていったのに対し、身体的なサインを読み取る診断方法は、肛門の反応やその拡張を検査することによって、診断がおこなえろとし、「肛門肥大症」が虐待の証拠とされた。Hobbs, C. J. and Wynne, J. M., "Buggery in Childhood: A Common Symptom of Child Abuse," *The Lancet*, 4 October, pp. 792-796, 1986.
- 52) DeSalvo, R. A., *op. cit.*, p. 1.

- 53) 斎藤学『子供の愛し方がわからない親たち—児童虐待、何が起きているか、どうすべきか』講談社、268頁、1992年。
- 54) 森田ゆり編『沈黙をやぶって—子ども時代に性暴力を受けた女性たちの証言+心を癒す教本』築地書館。
- 55) 斎藤学、前掲書、269頁。
- 56) この書くという行為の治療的意味付けは、ウルフ自身も言及するところである。例えば、ウルフ、『存在の瞬間』、125頁。
- 57) 池田由子はこうしたサイクルを「虐待のチェーン現象」、内山は「虐待の世代間連鎖」と呼称している。池田由子『児童虐待—ゆがんだ親子関係』中公新書、154頁、1987年。内山絢子「調査報告から見た我が国の児童虐待の実態と今後の課題」『子ども社会研究』第3巻、1997年。
- 58) 斎藤学、前掲書、171-195頁。
- 59) DeSalvo, R. A., *op. cit.*, p. 1, pp. 30-31, pp. 41-42.
- 60) Poole, R., *op. cit.*, p. 3.
- 61) Kahr, Brett, "The Sexual Molestation of Children: Historical Perspectives," *The Journal of Psychohistory*, Vol. 19, No. 2, pp. 191-214, 1991.
- 62) ミラー、前掲書、184-188、465-466頁。
- 63) The CIBA Foundation, *Child Sexual Abuse within the Family*, Tavistock, p. xx, 1984.
- 64) DeSalvo, R. A., *op. cit.*, p. 8.

Discourses of Sexual Abuse : Virginia Woolf as a Patient

MISHIMA Akiko

Before committing suicide, Virginia Woolf wrote her memoir, "A Sketch of the Past," in which she said that she was sexually abused by brothers-in-law in her childhood. Her experience as a sexually abused child has been discussed in Virginia Woolf studies. Most biographers think the experience had a great influence on her life and her works. For example, Dr. Emiko Kamiya, a well known psychiatrist, tried to explain Woolf's "insanity" and treated her as a patient of psychosis. This way of thinking can be considered as an outcome of development of Virginia Woolf studies in a sense when we read Quentin Bell's biography. Although Bell, Woolf's nephew, described her incestuous experience in it, he didn't mention the relationship between her "nervous breakdown" and the experience. Kamiya, whose understanding is different from Bell's, handled medical discourses for analyzing Woolf.

Afterward, many theories based on diverse disciplines have been applied to interpreting Woolf's "madness," and the "science of child abuse" has been adopted as well. Luise DeSalvo, one of the representative biographers of Woolf, depends on this new science. DeSalvo insists that Woolf was not a "lunatic" or a patient but a sexually abused child and "survivor." However, Virginia Woolf studies in Japan were limited in this respect because the "science of child abuse" has never been popular in Japan until quite recently. This paper illustrates various interpretations of Woolf's experience as a sexually abused girl

and investigates the efficacy of these interpretations that are based on theories not of sexual abuse but of other disciplines.